

「大地震見聞録」に記録された安政江戸地震における土浦での被害

原田智也*・西山昭仁(奈良文化財研究所)・石辺岳男(地震予知総合研究振興会)

§1. はじめに

安政二年十月二日(1855年11月11日)に江戸付近で発生した安政江戸地震では、江戸市中を中心に甚大な地震被害が生じ、約1万人の死者が出た。江戸市中における被害状況はかなり詳細に明らかにされており、それによる稠密な震度分布も得られている[例えば、中村・他(2002,『歴史地震』), 中村・松浦(2011,『歴史地震』)]。

一方で、江戸近郊における被害状況は江戸市中と比べ十分に明らかになっていない。安政江戸地震の震源推定には、関東地方における広域の震度分布が必要とされ[例えば、中村・他(2007,『歴史地震』), Nakamura *et al.* (2021, 17WCEE)], 近年、江戸近郊における被害状況を明らかにし、震度評価を行う研究が進められている[例えば、村岸・他(2016,『災害・復興と資料』), 中村・他(2019,『歴史地震』), 石瀬・他(2022,『印西の歴史』)]。

本研究では、「安政乙卯江戸大地震筆記」[『新収日本地震史料第五巻 別巻二ノ一』, 東京大学地震研究所(1985)]等に「水戸街道ハ土浦限り」と記述され、安政江戸地震による大被害の北限のひとつである土浦において、詳細な被害状況を検討した。現在のところ、土浦では、「江戸ハ水戸迄道中宿々地震強弱之次第書」[『新収日本地震史料続補遺 別巻』, 東京大学地震研究所(1994)]という史料の「土浦も大町辺敷敷土蔵は大半痛み本潰は無廂落申候」という被害記述が、中村(2004,『1855年安政江戸地震報告書』)による震度評価(震度5強)に使用されている程度にとどまり、他史料の検討による詳細な被害状況は明らかにされていない。

§2. 新史料「大地震見聞録」について

土浦の被害状況の検討には、土浦市立博物館所蔵の「大地震見聞録」(色川徳治家文書 75)という、既刊地震史料集に未掲載の新史料を使用した。同史料は、江戸時代後期の国学者として知られる土浦の色川三中(1801-1855)の弟である美年(1814-1862)によって記されたもので、美年宅を含む土浦における被害状況に加え、江戸市中や水戸・龍ヶ崎・銚子等の被害状況についての伝聞記事、お救い小屋や十一月二日の幕府による10寺院合同の大法要等に関する伝聞記事がある。

土浦における被害状況は、美年による日記「家事記 廿五」[『家事志 第六巻』, 土浦市立博物館(2014)]にも記述されているが、「大地震見聞録」より記述は簡潔で、しかも安政二年十月八日から同四年四月末

日まで欠落している。なお、「家事記 廿五」も、既刊地震史料集に未掲載の新史料である。

§3. 土浦における被害

「大地震見聞録」に記録された土浦での被害について、その一部を以下に示す。美年は、土浦城下の田宿町(現土浦市大手町付近)で薬種店を営んでいたが、向表店とその屋根には一切被害がなく、居宅の屋根にも被害はなかった。しかし、昨年の大水で破損し修復した居宅の壁が2尺程度(約60cm)落ちる被害が出た。また、土蔵の屋根瓦は全て動き、棟は1尺程度(約30cm)南へ寄りかかった。土蔵2階の菓箱や本箱は全て倒れたが、物品の被害はなかった。

一方、田宿町の北東隣の中城町(現土浦市中央付近)では、文庫蔵が大破して長屋も破損した。また、南西隣の大町町(現土浦市大町付近)では、土蔵の屋根・壁に残らず被害が生じた。なお、大町町の土蔵被害は、前出の「江戸ハ水戸迄道中宿々地震強弱之次第書」に記述されている。さらに両町では、「地わかれて水砂吹出候」と、噴砂現象がみられた。「田宿ハ此あたり少し静なる様ニみゆ、大町中条(中城)多く痛たる趣也」と記述されているが、表層地盤や微地形等の局所的な違いによって、被害程度が異なると考えられる。

土浦城の被害については、御殿が少し破損し、蔵の壁が残らず落ちた。一方、城内の長屋に被害はなかったが、これは長屋の屋根が茅葺きだったからだと言われていると記述されている。

以上の被害状況から、土浦全体の震度は、5弱～5強程度だったと考えられる。

§4. 土浦周辺における被害

「大地震見聞録」には、土浦周辺の被害状況について伝聞記事がある。その一部を以下に示す。龍ヶ崎では、人家6,7軒が倒潰した。小金(現千葉県松戸市小金)よりも江戸に近づくと潰家が多くなり、松戸では潰家が多く生じ、火災も発生した。一方、水戸付近における地震の揺れは小さく、安政東海地震と同程度だった。また、銚子付近でも地震の揺れは小さく、また、安政東海地震では津波があったが、今回の地震ではなかった。

謝辞

「大地震見聞録」の写真版と翻刻のコピーを提供して頂いた、土浦市立博物館学芸員の木塚久仁子氏に感謝致します。